

## 心理臨床の場における「ドラマ」の意味 ——ミニチュアの舞台と人形を用いた継時的調査の一事例に着目して

岡本直子 沖縄国際大学総合文化学部  
Naoko Okamoto Faculty of Regional and Global Culture, Okinawa International University

### 要約

本研究では、人間の内的世界の表現を動きのある劇的なもの、すなわち「ドラマ」としてとらえた。そして、「ドラマ」に着目することで、心理臨床の場におけるクライアントの「ドラマ」表現の意味を理解する手がかりを得ることを目的とした。方法としては、心理臨床の場に近い枠組みに則って、「ドラマ」と振り返り面接からなる調査を「表現者」Bを対象に継時的な形で実施し、「ドラマ」を表現する意味について個性記述的立場から検討を行った。調査は毎週1回、同一曜日の同一時間に設定し、10回行った。その結果、10回の調査のプロセスを経て「表現者」Bが「ドラマ」のキャラクターに肯定的イメージと否定的イメージを投影し、次第にこれらのイメージを自己のなかに統合していったこと、「ドラマ」の架空性に安心感を抱き、日常においては抑えている衝動をその安心感に支えられながら表現するようになったことなどが示唆された。さらに、「表現者」Bと見守り手との関係性の構築も推察された。

### キーワード

「ドラマ」、表現、心理臨床、関係性、投影

### Title

**The Meanings of "Drama" in Therapeutic Practice: Focusing on a Case Pictured out from a Series of Research Sessions.**

### Abstract

In this study, the author investigated the expression of the inner world as dynamic "drama", in order to understand the therapeutic meaning of expression during "drama". A series of research sessions consisting of "drama" and interviews, consisting of a framework similar to that of psychotherapy was implemented with participant B and the meaning of expression in "drama" was examined idiographically. The study was conducted 10 times, once a week on the same weekday and at the same time. Results indicated that participant B projected both positive and negative images on the characters in "drama", and after a long period integrated both types of images within him. Also, the personality of participant B gradually became more flexible. He also displayed increased playfulness that he showed during "drama" without conscious realization. Moreover, the relationships between participant B and the observer (researcher) began to grow.

### Key words

"drama", expression, psychotherapy, relationship, projection

## I 問題と目的

心理臨床の場では、突如劇的な現象が生じ、それを契機としてクライエントがこれまで目を向けていなかった現実と直面したり、新たな気づきを得るなどして問題解決へと向かっていくことが少なくない。また、このような劇的な現象それ自体がクライエントに治療的意味を与える場合もある。

河合（1970）は、大学生のクライエントが父親の悪口をさんざん述べたてる事例を紹介している。そのクライエントは父親がいかに頑固で分からず屋であるかをセラピストに語り、父親を攻撃し続けた。そして暫し沈黙した後に、「実は色々悪口を言いましたが、今まで私の学資を出してくれているのも、お父さんなのです」とセラピストに告げた。この面接の後に帰省したクライエントは次の面接で、「あれほど言いましたけど」と前置きした上で、父はそれほど頑固ではないこと、考えてみると父も話のわかるところもあることなどを語り、自分と父親との関係のとらえ直しの作業に向かうようになった。

一方、藤原（2001）は、ヘビ恐怖のために怪獣好きの子どもと絵本を読むなどして過ごす時間に苦痛を覚えていた女性クライエントに三角形イメージ体験法を適用した事例を記している。クライエントとセラピストがともに三角形を共通の課題として心理的機能と意味を付与することを繰り返すうちに、クライエントは三角形イメージをトンネルの入り口のように見立てた。そして、暗く長いトンネルを奥行きに向かって進むというイメージを展開し、トンネルのなかで光が見えない心細さに涙した。クライエントは何度かトンネルから抜けられないような感じを体験した。3度目のセッションで子ども時代に父親が蒸発したことを独り言のように語ったクライエントは、突然トンネルの向こうにぼんやりと光る出口を見出し、それを抜けて深い解放感に至った。このクライエントは父親の蒸発のこととトンネルから抜けられない感じとの関連に気づくようになる前にも、セッション中にその感じを抱いた時に、昔からあったような不思議な気がしたとのことである。

また、心因性発熱と自律神経失調症をともなう不登校を主訴とする小学校5年生女兒（クライエントA）に関する筆者の事例（岡本，2001）では、次のことが示されている。複数の友人から受けた嫌がらせが心の傷となっていたためか、来談当初のクライエントAは萎縮した無口な様子であった。しかしプレイセラピーを続けていくうちに彼女の萎縮した感じはなくなり、プレイルームでは伸び伸びと振る舞うようになっていった。終結を目前に控えたある回のセッションにおいて、ビリヤードゲームの合間に突然、セラピストを火事の家の人に見立てた。そしてセラピストに119番通報で助けを求めるよう要請し、自らは「消防士」に扮した。彼女は、燃えさかる我が家を前に大慌てのセラピストに対して冷静かつ懸命に消火活動に励み、見事にセラピストを助けた。その後のクライエントAは次第にたくましい感じになり、学校では信頼できる友人と出会い、相手に合わせるばかりでなく自分を出せる友人づき合いができるようになっていった。

河合（1970）、藤原（2001）、そして筆者（岡本，2001）の事例で紹介した劇的な現象は、一見、突如生じたかに見えよう。しかし、そのような現象はそれまでのプロセスの積み重ねがあってこそ生じたのであり、さらに突き詰めると、それまでのプロセスの一瞬一瞬においても劇的な現象がベースとして生起していたと考えられよう。

心理臨床の場において見受けられる「劇的な臨床的現象」は、先に示したものに限らず、かなり一般に見受けられる。そして、こうした現象が生起する背景には、いわゆる小さな劇的体験のプロセスがあると推測される。心理臨床の場ではいかなる場合も、クライエントが自己の感情やイメージを身体や言葉などを通して表現することによって、彼／彼女が心の片隅に追いやってきた事実気づくことができるのであり、その背後には必ずそれを見守るセラピストの存在がうかがえるのである。このようなクライエントの表現は全て「ドラマ」という言葉でしか言い表しようのない劇的なものであり、そこに人間の成長への可能性、力が感じられる。既に述べたように、「ドラマ」は心理臨床の転回点と呼ばれるような飛躍的な現象においてのみならず、一瞬一瞬に生じている、すなわち、心理臨床の場のなかの何の変哲もないクライエントの表現に

も「ドラマ」が内蔵されていると考えられる。

ここで断っておくが、本研究で論じる「ドラマ」が意味するものは演技の才能ではなく、内的世界の表現である。「ドラマ drama」という語は、日本語では「劇」と訳されることが多い。河竹(1978)によれば、「劇」という字は、「虎」と「猪」と、刃物を示す「丨」の合成で、二匹の猛獣もしくは猛獣のごとく猛々しい対立者が牙をむいて激しく闘う有様を意味している。そしてそれは人間が、運命、神、境遇、社会悪、もしくは自己の内にひそむ相反する性情などとの矛盾、対立、ぶつかり合いを体験し、それを通して次々に行為を生み、1つの結末に至る過程を表すという。この過程はまさに心理臨床のプロセスそのものではないだろうか。さらに、「ドラマ(drama)」の語源がギリシア語の drama で「人間の行為、行動」を示す(『英和大辞典カラー・オックスフォード』, 1984)ということからも、人間の表現の動的な性質をこれほどまでに見事に表象する語は他にはあり得ない。換言すれば、これまでの心理臨床学の研究ではあまり注目されてこなかった現象と、そこに存在する人間の息吹や鼓動を包括的に考える上で最適な語であると考えられる。

これまで述べてきたことから、「ドラマ」の視点は、心理臨床の場におけるクライアントの表現とその表現の生じるメカニズムなどについてとらえる重要な示唆をもたらすと推測できる。かように動きをもつ表現を「ドラマ」という枠組みからとらえ、それがいかなる癒しの機能を備えているのかに焦点を当て、人間の内的世界が表現されることの意味、すなわち「ドラマ」がもつ心理臨床学的意味に関する研究を行う意義がうかがえる。そこで本研究では心理臨床の場の構造を想定したモデルとして、心理臨床の場と近似の構造のなか、1人の「表現者」(「表現を行う者」という意味で、以後、本研究では「被験者」の語の代わりにこの語を用いる)に10回の継時的調査を実施する。このように心理臨床の場に近い枠組みで行った調査の一事例に個性記述的立場から着目する。本研究で扱うのはあくまでも個の事例であるため一般化した解釈は避けねばならない。しかしこの個別事例の展開を通して、「ドラマ」を表現する意味について理解する手がかりを得ることを本研究の目的とする。

## II 方法

### 1 「表現者」

X-1年10月から12月にかけて62名の大学生に対して、「ドラマ」と振り返り面接からなる単発調査を、筆者が見守り手として関わり実施した。そのなかから、Bさん(22歳、男性)に継時的調査への協力を依頼した。Bさんを選定した理由は、単発調査における「ドラマ」と振り返り面接でのBさんの様子から次の2点がうかがわれたためである。1つは、見守り手との継続的関係性を保つことが可能と判断されたことである。2つめは、10回の調査という枠組みのなかで内的世界の表現を行いそれを納めていく心的健康度をBさんが備えていると考えられたことである。Bさんの第一印象は控えめで礼儀正しく理知的で繊細な感じであった。また、どこか自嘲気味で、厭世的な様子が見えがえた。外見は細身で長身、やや猫背気味であった。10回の調査のうち、前半の回では入室時や退室時に堅さや距離感のようなものを見守り手は感じた。その反面、「ドラマ」では身振り手振り豊かにキャラクターのセリフを発し、セリフに合わせて表情も変化するなど、積極的な様子が見受けられた。「ドラマ」終了後の振り返り面接においても、非常に生き生きと自信あり気に内省を語った。

### 2 調査の枠組み

X年6月から12月にかけて「ドラマ」と振り返り面接からなる調査を実施した。調査は毎週1回同一曜日の同一時間に設定し、10回行った。見守り手は「表現者」の右後ろの、視界に姿が若干入る場所に位置した。振り返り面接は表現を終えた後に行った。ここでは表現を通して感じたことや印象に残ったことなど、「ドラマ」を振り返る形で「表現者」の感情体験に焦点が当てられた。「表現者」が語る内容に則しつつ、印象に残った場面や「ドラマ」から連想すること等についての問いかけも行われた。これらのやり取りは、「ドラマ」についての内省報告を得ること、「表



図1 ミニチュアの舞台と人形を用いた即興劇の一場面

現者」を現実世界に差し戻すことの2つを意図してなされた。なお、「ドラマ」に表現されたものと「表現者」の内的世界との関連性を理解するためには「表現者」の現実世界について理解することも重要と思われた。しかし、10回という回数が限定された調査研究の枠組みで「表現者」の現実世界について見守り手から積極的に尋ねると、「表現者」の抱えるテーマなどを10回で収まりきれないほどに顕わになってしまうと危惧されたため、これは控えた。「表現者」の了承を得た上で、「ドラマ」はビデオ撮影し、振り返り面接の内容は録音した。

### 3 「ドラマ」表現の媒体

「ドラマ」を表現する媒体としては、Shneidman (1947) が開発した Make A Picture Story (MAPS 人格投影法) 検査用具のミニチュアの舞台と人形を用いた即興劇を採用した。MAPS 人格投影法検査用具は、ミニチュアの舞台と22枚の背景場面の図版(縦21.5cm, 横27.7cm), そして67個の人物像と2個の動物像の計69個の紙人形からなる。MAPS 人格投影法検査用具は本来は投影法の検査用具として用いられ、被検査者が人形を好きなように配して構成した一場面をもとに物語を作るといった施行法がとられていた。MAPS 人格投影法の本来の施行法はこのように物語を被検査者に作らせるものであるが、本研究では単なる物語ではなく、人形を「ドラマ」に登場する役割すなわちキヤ

ラクターとして動かし、キャラクターを通してセリフを発する形式で「表現者」に即興劇を表現するよう求め、表現された即興劇を「ドラマ」としてとらえていくことにした(図1)。以後、本研究においては、「ドラマ」を表現する道具としてのミニチュア人形と「ドラマ」に登場する役割とを区別するため、「ドラマ」に登場していない段階での、道具としての存在を「人形」と記し、「ドラマ」に登場する役割を「キャラクター」と記す。

#### 提示場面の選択

予備的に行った調査の結果から、「表現者」が表現する「ドラマ」の数は2つ(したがって2場面)である場合が、「表現者」が「ドラマ」に馴染め、かつ「表現者」の負担も大き過ぎず、適切であると考えられた。2つの場面は「ドラマ」の表現に自由度の高い場面が選ばれた。すなわち、1番目の場面としては「街路場面」が様々なテーマが表現され、導入として易しいこと、2番目の場面としては「地下室場面」がより深いところに降りていくが特定のテーマに固定されないことが予備調査からうかがわれたため、本研究では、第1回目の調査のみ「街路場面」、「地下室場面」の2場面を順番に「表現者」に提示し、2回目以降は「地下室場面」のみ提示することにした。

#### 人形

使用する人形については、人形の性別や年代が偏ら

ないよう留意し、MAPS人格投影法検査用具の人形から選別した42の人形と、同様の理由から新たに作成した6つの人形の、計48の人形を用いた。人形にはスタンドをつけ、立体人形のように立たせた。

### III 「ドラマ」と内省の経過

10回の「ドラマ」と振り返りの流れから、第1回から第3回が初期、第4回から第7回が中期、第8回から第10回が終期と、3つの期に分けられた。以下に、Bさんの「ドラマ」を脚本の形で起こしたものの抜粋と、振り返り面接においてBさんが語った概要を各期各回ごとに記載する。振り返りでの見守り手の言葉は〈 〉で、Bさんの言葉は「 」や地の文で記す。脚本の省略は- { } -と表記し、省略した内容の概略を記す。

#### 1 初期（第1回～第3回）：日常では憚られることを表現した時期

第1回（この回のみ「街路場面」「地下室場面」の2場面）：即興性を楽しみ、自由に表現

##### 「ドラマ」1-1 第1回「街路場面」

- {前略：街路に「ヘビ」が現れる。物珍しさや可愛らしさから町の人々がヘビを見にやってくる。皆で「ヘビ」をもてはやしている矢先、「ヘビ」が「幼児」に噛みつき、一転、街はパニックになる。} -

母親 ちよっとー！ 救急車！ 救急車！ 救急車！！

サンタクロース （登場）エイッす！

女性 ちよー！ あんたじゃないのよ！！

サンタクロース そ……そうですか……すいません（退場）。

警官 救急車つつってんでしょ！ 救急車！！

スーパーマン （登場）私を呼んだかね？

母親 ああ、スーパーマンじゃないか。実は……娘がヘビに噛まれて……

スーパーマン 何!? （困ったように）そりゃあ……俺には無理だ。さよなら！（素早く退場）

母親 ちよっとー!!

幼児 （苦しうに）ああ……！ ああ……！

母親 どうしよ、どうしよ、どうしよ……そうだ！ もういいわ。私が病院まで連れてくわ！ こんの一、役立たず！（「警官」を突き飛ばし、舞台外に追い出す）

- {後略：「ヘビ」に噛まれる被害が相次ぐが、「警官」は戸惑うばかり。そこへ突如「強盗」が銃を持って現れる。「警官」は『「ヘビ」をやっけたら表彰する』と「強盗」を言いくるめ、「ヘビ」を撃たせ、「強盗」を銃刀法違反で逮捕する。} -

##### 「街路場面」の振り返り

無心でやった。セリフがポンポン出てくると楽しさを感じたけど、話をどうつなげるかで「苦しいなあ」とも思った。この「ヘビ」は、最初の設定では街の可愛いマスコットにしようと思っていたけど、やっているうちに勢いで毒蛇化した。マスコットが一躍悪者になったので、「これは予想外のとんでもないことになった」と思った。〈毒蛇に一転したのは？〉やっぱり、ただ可愛いだけじゃつまらない。可愛い可愛いと思って飼犬に手を噛まれる、みたいなのがいいかなと思った。

##### 「ドラマ」1-2 第1回「地下室場面」

- {前略：「継母」にいじめられた「息子」が地下室に素っ裸で閉じこめられている。そこで自分の「父親」が成人誌を読みふけているのに出くわすが、「父親」は知らぬ間にいなくなる。ふと気がつく「裸の女性」が地下室にいる。そこへ「継母」が戻ってきて「息子」を詰問する。} -

継母 （呆れかえった様子で低い声で）ほんともう……嘘はつくわ、ハレンチ行為はするわ……あんた、まるであれやねえ、ほんと！ C（※筆者注：自宅の地下室で問題行為をはたらいた息子のためにマスコミに騒がれた女優）の息子みたいやね！ ほんと！ "ベシッ!"（「息子」を叩く）

息子 ヒーイ!! ちやうってー！ 何か違うんやって！ 俺、何もしてないちゅーの、ほんと！

継母 もう、ほんとねえ！ あんた、香港辺りに

売るよ、ほんと!!! 世が世ならばほんと!  
反省しとけ!! (退場)

- {中略：服を探し続ける息子は、ボロボロのようなものを見つけ、これを身に着ける。すると別人の姿(「浮浪者」)に変わってしまう。} -

**継母** (登場) あーもう、反省した!? キャー!!  
あんた誰や!?

**浮浪者(息子)** 俺や、俺。息子の……息子の、  
息子の……息子の……ミリノビッチや。

**継母** 誰や! ミリノビッチって!? サッカー選手  
やん! あんた、自分の名前も忘れたんね  
ん!?

**浮浪者(息子)** ちゃうやろう、ミリノビッチ…  
…何ビッチや? ビッチよ、ビッチ。ビッ  
チは覚えとんねん。ビッチ……ビッチ……

**継母** ビッチ、ビッチって! ビッチ、ビッチっ  
て、これ、あんた! 私に対する侮辱!? ビ  
ッチ、ビッチって!? (※筆者注:「ビッ  
チ」は英語の俗語で「あばずれ」の意味)

**浮浪者(息子)** や、ていうか、俺の名前が何と  
かビッチやしな、これ。

- {後略:「継母」は「不審人物がいる」と警察に  
通報し、「浮浪者」の姿の「息子」を連行させる。  
「継母」が地下室に1人残っていると、「宇宙人」  
が登場する。詰問する「継母」を「宇宙人」はレ  
ーザービームで撃ち、「継母」は気絶する。} -

### 「地下室場面」の振り返り

最初は「父親」がしゃがんで成人誌を読んでいる部  
分までしか考えていなかった。セリフは一言もなかつ  
たけど、印象に残った。あと、「継母」の喋るセリフ  
が好きだった。自分で喋っておきながら、「面白いな  
あ」と思った。ただ、「Cの息子」のところは、言お  
うか言うまいか少し迷った。一応自分1人でやってる  
けど、やっぱり見ている人がいるし、見ている人がわ  
からなかったら嫌だなと思って。セリフがポンポン出  
てくるとすごく面白い。スッとするとというか、頭にない  
ことがパッとアドリブで出てくると面白い。

### 第2回：キャラクターを通し、自己の弱い側面を表現

#### 「ドラマ」2 第2回

- {前略:「おじさん(前回では「父親」)」が路上

で成人誌を読みふけている。そこへ「おじさ  
ん」の「妻」がやってくる。} -

**妻** 何よ!? あんた、会社はリストラされてたの  
に、そんな……日もすがらそんなエロ本ば  
っか読んでから!

**おじさん** (動揺して) や、これはやな、しか  
し、これは……これはしかし、再就職の、  
ね、業界の方のね、この、ね……

**妻** 何をブツブツ言ってるの!? あんたもう本  
当、離婚やで!

**おじさん** (悔しそうに) ちつきしょう……じゃ  
あこの財産は……この家とかどっちのもの  
やねん?

**妻** あんた何言ってるの!? あんた、婿養子の分  
際で!

**おじさん** クソ……これはしょうがない……わ  
かったよう……離婚届に判押しし……そう  
かなあ……どうしようっかなあ……よし!  
こうしよう。俺がじゃんけんで勝ったら押  
したるわ。あ、間違った、俺がじゃんけん  
で負けたら押したるわ。その代わり、お  
前、俺が勝ったら……押さんぞ。いくぜ、  
これ。で、最初は……パー!

**妻** ゲー!

**おじさん** 俺の勝ちや!! (喜んで飛び上がる)

**妻** (呆れ果てた様子で) あんた……今時、ほ  
んと、小学生でもそんな、そんなセコイ真  
似っていうか……セコイ真似っていうか、  
そんなん!! セコイ真似にもならんわ! 誰  
が認めるんや、そんなん!?

**おじさん** (小声で) や……勝負は勝負や……

**妻** ダメやって!! もう、そんなん認めへんよ、  
ほんと! あんたほんとね、そんなんでい  
いの!? 何か心配になってきたわ、あんた1  
人にすんのも、こら、ある意味!

**おじさん** (得意気に) だろ!? そうだろ!?

**妻** とか思わすのがあんたの……狙いなんでは  
しょうがー!!

**おじさん** クソ……ばれとるか……じゃ、もっか  
いや、しょうがないなあ。じゃ、最初のグ  
ー……じゃんけんぽん。……あら、負けち  
ゃった……(元気良く)よし! 今のな  
し。練習。

- {後略:結局、「おじさん」は負け、離婚届への  
捺印を迫られる。「おじさん」は逆上し、銃で  
「妻」を追い回すが、警官にあえなく逮捕され

る。} -

### 振り返り

今振り返ってみると、この「おじさん（筆者注：前回に「父親」として登場した人形を使用）」の情けない部分や尻に敷かれているところは、他人とは思えない何かを感じさせる（笑）。「おじさん」がじゃんけんで負けたら離婚届に判を押したるわと言ってじゃんけんしてるところは、こういう決断を迫られた場面で自分がじゃんけんをやっている絵が頭のなかにあった。「往生際悪いなあ！」とか思った。その往生際の悪いのは自分の投影というか、自分そのままにやっている。自嘲気味というか、自分のことなだけで少し小馬鹿にしたような感じでやっていた。（それをここで出すことにためらいは？）もう自然に出ちゃったんで、出ちゃったものはもう仕方ない（笑）。それに、「これが自分で」と自分が言わないと、まさかそれが自分のこととはわからないかなと思って。見ている人がいることを意識しながらやった方が張り合いがある。これを誰も見ていない所で1人でやっても虚しいし（笑）、自分のなかで盛り上がらないと思う。1人で作ると自己満足になりそう。1人だと、自分は面白くても他の人が見てどうなのかわからなくて気持ち悪い。

### 第3回：見守り手を意識した「ドラマ」

#### 「ドラマ」3 第3回

- {前略：クリスマスを前に、「サンタクロース」がアルバイトのサンタ達を集め、志気を高めようとしている。しかしアルバイトのサンタ達は待遇の悪さに不満を抱いている。そこへバイトサンタの1人「ジャック」が銃を持って登場し、「サンタクロース」が年間5億の私腹を肥やして独り占めしていることを暴露する。一同騒然となる。「サンタクロース」は周りからの追及にとぼけたりして場を切り抜けようとし、皆は呆れ果てる。銃で脅された「サンタクロース」は「金なら出すから許してくれ」と懇願する。} -

ジャック もうほんと、撃つぞ!! お前、さっさと  
言えや!! いくら出すんや!?

サンタクロース うーん……5、5……5億……

ジャック 5億!?

サンタクロース ト、トルコリラ……

ジャック 5億トルコリラ? いくつ? 誰か知つ  
とる奴おる?

バイトサンタA あー、あの、詳しい数字は知ら  
んけど、トルコリラってメッチャ安くな  
った? 日本円にしたら? 5億って、確か  
ねー、前、何か見たテレビでね、何か、1千  
……百万やったっけ? あ、いや、1千万ト  
ルコリラが714円とかいう話を聞いたから  
……5億トルコリラつつうことは、3万5千  
円位かね?

ジャック (怒りいっぱい) このおガキヤ、  
ほんと!!!!

サンタクロース わー! わかった、わかった、  
わかった、わかった。わかった、わかつ  
た。じゃあ5、50億トルコリラで……

ジャック っていうか、(地団駄踏む) まだ35万  
やねえんか、それでも!?

サンタクロース わ、わかった……5億……や、  
5、5億……5千万……や、5千万の10%つ  
てどこか……あ、いや、5千万ウオン!

ジャック 5千万ウオン……? ウオンって知つと  
る奴おるか? 韓国の、確かあれやけど。

バイトサンタA あー……(自信なさ気に)隣の  
国やけど、ちょっと知らんな……(自信あ  
り気に足踏みをして)でも、確か、5千万ウ  
オンやったら、5千万円より安いことは確か  
やと思うぞ!

ジャック このガキが1度ならずも2度までも  
そんな汚い言いわけしおって!!

- {後略：怒った「ジャック」は「サンタクロ  
ース」を撃つが、弾丸が髭にからまったため「サン  
タクロース」は難を逃れる。結局、「サンタクロ  
ース」に権力が留まる。} -

### 振り返り

毎度のことながら、どうしてもブラックというか、汚らしい、ずるい、という言葉が似合うものになってしまう。やりながら自分に対して「うわっ、素直じゃないな」と思っていた。でも、自分はサンタクロースに対してこんな悪徳なイメージは全くもっていない。小さい頃もサンタクロースが絶対いると信じていた。今回は、劇でやるんだったら普通のサンタ像でやってもつまらないだろうということで、あえて自分で思っているのと逆の、こんなサンタがいたら嫌だなという

発想でやった。

今回のは割と見ていてわかりやすかったと思う。それが満足でもあり、逆に物足りなくもある。やっぱり見ている人を意識してセリフを作っている部分がある。例えば、面白そうな、笑いがとれそうなことを言ったら「ちゃんと笑ってくれるだろうか？」と思ったり。1回目とかはそれは思わなかったけど、前回辺りからそういう気持ちが出てきて、それで言葉がどんどん増えていった。言葉だけで攻めているような感じがしたのがちょっと嫌だった。

## 2 中期（第4回～第7回）：否定的側面と肯定的側面を表現した時期

### 第4回：嘲りの対象として用いた「ヨントス」に一転、親しみをもつ

#### 「ドラマ」4 第4回

- {前略：初対面の男女7名で合コンが開かれている。メンバーにはヒップホップの「ヨントス」と名乗る男性がいる。} -

**エマニエル** えー、ヨントスさん。ヨントスさんって、何でヨントスアルサンドロなんですか？ 本名？ それ本名ですか？

**ヨントス** Hey！ 本名だぜ！

**佐藤** え、ヨントスさんって何か趣味、何か……そう、ヨントスさん、生まれはどこですか？

**ヨントス** ああ、俺？ 俺、東京生まれのヒップホップ育ちみたいな。

- {中略：女性陣は「ヨントス」のヒップホップのノリに引いてしまう。二次会に移動という段になり、女性陣は「ヨントス」には二次会に来て欲しくないと思われ、密談する。} -

**ヨントス** Hey！ 彼女達！ 次はどこに行く yo!？ おいら、カラオケ、カラオケ大好きだよ。

- {後略：「ヨントス」は女性陣の気を引くために、自分はとても有名なDJで、今大人気のミュージシャン達とも友達だと出せを言い、それを信じた女性陣は態度を好転させる。} -

#### 振り返り

前回は見ている人が面白いようなものを意識して、セリフに凝っている感じで、そこが不満だった。今回は普通の設定で普通のことをやろうとしていたので、笑わせようとかいう気負いはなかった。だから、あまり考え過ぎずにその場の成り行き任せでやった。そのこともあって、当初の予定と随分と感じが変わった。普通な感じのものにするはずが、やっているうちにどんだん間抜けになっていった（笑）。自分はヒップホップは嫌い。口だけというイメージがある。何か、俺たちや社会に屈服していない、みたいな自己主張をしているんだけど、「自己主張しているようで、結局お前ら、似たり寄ったりでダセえじゃん」と思う。歌にしても、疲れた歌い方をするのも無理に韻を踏むのも何か滑稽。ヒップホップを嘲るためにやったわけだから、「ヨントス」も「普通に嫌な奴」みたいな、自分を格好良いと勘違いしているような感じにしたかった。なのに、ものすごく親しみのある馬鹿になっていった（笑）。イメージからずれてきたけど、もうこのままいっちゃおうと思った（笑）。「ヨントス」は嫌いな奴としてやるはずだったのに、やってたら一番のって楽しかったし、親しみももてた。最初に「yo！」と言ったところからもう（笑）。だから、最初に思っていたのとは違うけど、楽しいからいいや、結果オーライ、という感じ。

### 第5回：「ヨントス」再登場—目立ちたいけど冷静でもありたい

（調査の前に見守り手が部屋のドアを開けて待機していると、約束の時間の少し前に「表現者」が部屋の前まで来て立ち去った。5分ほど後、いつものように礼儀正しく静かな雰囲気であ室した。）

#### 「ドラマ」5 第5回

- {前略：ライブハウスでロックバンドがライブをやっているが、客席に飛び込んだボーカリストが骨折してしまう。} -

**ヨントス** （「トニー」に駆け寄る）Hey！ どうした？ Oh！ それ、ダイブとか俺の役目じゃんか yo！ Oh！

**トニー** おお、ヨントス……

**ヨントス** 大体、何で俺がこのバンドにいる……俺の存在意義もわかんないじゃないか yo！

俺の役目をとるな！

- {中略：そこへ「強盗」2名が乱入する。「強盗」が本気であることを察知した「ポール」は強盗の目的を尋ねる。「強盗」は皆を人質にすることを伝え、「観客」の頬に銃を突きつけ威嚇する。「強盗」の卑劣さに「ポール」は憤慨するが、何もの術がない。そこへ「ヨントス」が「強盗」に向き合う。「ヨントス」は上体を反らして強盗が撃つ弾を見事にかわす。}-

**ヨントス** (後ろに上体を反らし弾をよける) おーら！ おーら！ おーら！ おーら！

**強盗** 何て奴だこいつ!? 人間じゃねえ、人間業じゃねえよ！

**観客** すげーよ！ すげー、ヨントス!! お前、絶対ヒップホップとかやるより、何かそっちの方面で売っていった方が絶対いいぞ!! すげえ!!

- {後略：「強盗」はやっつけられ、皆は「ヨントス」のおかげで助かったと感謝する。「ヨントス」は上機嫌で、「今日から俺がこのバンドのボーカルだ。日本の音楽シーンに風穴開けちゃう yoー!」と宣言する。}-

装置に関心を抱き、「ノーベル賞もいけるのではないか」と盛り上がる。そして、テレビカメラの前で装置に入って変身するよう「博士」に提案する。装置に入った「博士」は「ヘビ」に変身して出てくる。}-

**記者 A** ということは、このヘビは教授ということになるんでしょうか? (「ヘビ」に) 教授さん、教授さん。

**ヘビ (博士)** (突然) シャーッ!!!! "ガブッ!!" (「記者 B」に噛みつく)

**記者 B** うわー!!! 噛みやがった!

**記者 C** そら、ヘビだもの。

**記者 A** そらそうだ、教授だけどヘビだもの。しっかも、毒蛇だもの! やばいっすよ!

**記者 B** うわー! 誰……救急車だ! 救急車! 救急車だ!

**記者 A** しかしこれ、あれだな。

**記者 C** あれねー、もう。ヘビにノーベル賞なんかあげても。

**記者 B** ヘビだもの!

**ヘビ (博士)** シャーッ! シャー! (「記者 A」, 「記者 C」に次々と噛みつく)

- {後略：騒然となり、放送が中断される。}-

## 振り返り

「ライブをやるよ」まで考えていて、メンバーを選んでいたらこの人形(「ヨントス」と目が合っちゃって(笑)。絶対に入れたらいけない、入れたら滅茶苦茶になる、とわかってたんだけど、入れたくなってしまう。もう、目が合った時点でこの人形は「ヨントス」だった。「ヨントス」は先週1回出てきただけなのに、すごく親しみが湧いてきた。確かに自分にも目立ちたいと思う側面はある。こんな馬鹿な目立ち方じゃないけど(笑)。あと、「ポール」のような冷静な場を締める側面ももっていたいなと思う。

## 第6回：変身マシーン-冷静さへの憧れ-

### 「ドラマ」6 第6回

- {前略：透明人間になる装置を「博士」が完成させる。実験台になった助手は「幼児」の姿になってしまうが、この装置を「世界一お金のかかっているびっくり箱」として発表することを提案する。そして記者会見の手はずを整える。記者達は

## 振り返り

今回は結構満足。いつもは、あまり考えないようにはしていてもどこか考えてきていたところがあったけど、今回は考えないことに成功した。その場で意図したようにやれているという楽しさがあった。次をどうしようとか、見ている人に伝わっているだろうかという焦りはなかった。実は、今日も「ヨントス」を出そうかなと少し思った。変身で「ヨントス」になる、みたいに、「ヨントス」を出そうと思えばもう、いくらでも出せるんだけど、やめた。「ヨントス」は濃いキャラクターだから、しょっちゅう出すのもしつこい気がしたし、忘れた頃に出すのが良いかなと思って。あと、「ヨントス」を出したのが最後、彼の独壇場になるのは目に見えていたから(笑)。この「幼児」になった「助手」は好きですね。別に中身は子どもじゃないんで当然なんだけど、何か子どものくせにすごい落ち着きがあって、すごい人間。姿が変わっても少し驚いたくらいで結構平然としているし。自分もこんなに平然と振る舞えたら良いなと思うけど、実際の自分はう

ろたえたり動揺したりすると思う（笑）。今回は最初からあまり笑えるような話にはならないと思っていたので、笑いはあるともなくても構わなかった。

### 第7回：攻撃性の発露と抑制

#### 「ドラマ」7 第7回

- {前略：悪党の人質となった「どら息子」を刑事達が助ける。が、その後、「どら息子」の発した高慢な言葉に「刑事 A」は怒り、「どら息子」を殴る。} -

**どら息子** （倒れる）おっふっ！ おっふっ！  
何すんだー!? 公僕がそんなことして許されると思ってたのかあ!? あー!? ん? 僕のお父さん国会、国会議員なんだけどな〜。  
ん? どう落とし前つけてくれるのかなー、ちょっとー。(わざとらしく) アタタタター、頬骨折れちゃった〜

**刑事 A** (悔しそうに) こいつ……!!

**刑事 B** 先輩、こんな奴のために命賭けたかと思うと……ほんと、消したかった過去にして……先輩……自分が許すっす。もう見なかったことにすっす。先輩、もう……

**刑事 A** とりあえず、あー……とりあえずまあ、殺すのはさすがにまずいから、もう 1 発くらい、ね。おりゃ!! (「どら息子」を殴る)

**どら息子** ヒイッ! (倒れる)

**刑事 A** おーら、どうした! どうした!! もういいよ! てめえのために首飛ぶのもあれだが、もういい!! お前をほんとに、ぶっちゃけ、殺したいけど、もう、地獄見せてやるよ! ほんとにもう!

**どら息子** ヒイッ! 助けてくれ! 金ならある! 金なら! と言っても子ども銀行券だけでも。

**刑事 A** てめえ! この野郎!! ドケチがー!! (「どら息子」を殴る)

**どら息子** クソッウ、てめえら! いいのか? ほんとにいいのか? お父さんに……僕のパパに言えば、てめえらの首の 1 つや 2 つ吹っ飛ばんじやうんだぞ!

**刑事 A** 別にいいぜ、俺は別に! 食いブチならいくらでもあるからよう!

**どら息子** いいのか、そんな威勢のいいこと言ってる!? もう、圧力かけたらなあ、こっちが圧力かけたらなあ、てめえなんてなあ、一ひねりなんだよ、この野郎!

**刑事 A** うっせえ、お前! 減らず口ばっか叩くな!! 馬鹿たれ! おら、ヘッドバットじゃ! ボケ!! このお!! 本当、お前、何や、本当、調子が悪くなったら正論ばっか!! んもう、おらそういう奴が大嫌いなんだ! ボケなすー!! おら! キンテキじゃ、ボケー!! (「どら息子」を殴り倒す)

- {後略：「刑事 A」は気が済むまで「どら息子」を殴り倒す。このことは、「国会議員の息子を刑事が半殺しにする事件」として夕方のニュースで報道され、非難される。} -

### 振り返り

最初は、この「どら息子」は一言も発さないただの人質で終わるはずだった。ただ、「僕のお父さん国会議員なんだけどなー」の一言からもう変わってしまった。言った瞬間にもう、こいつが嫌な奴だというのが確定して、「こいつを本当にひどい目に遭わせてやりたいなー!」と思った。そう思っていると、どんどん嫌な奴になった(笑)。自分のもっている「嫌な奴」のイメージを投影した。こいつに対してすごく嫌な気分になった。「刑事 A」がこいつを色々殴ったり蹴ったりしている時は楽しかった。こいつをやっつけているところではもう自分がなかに入ってやっていた。でも、「どら息子」はボコボコにされるけど、最終的には警察官の不祥事ということで「刑事 A」がマスコミに叩かれるようになって、嫌な奴が勝つ、みたいになってしまった。自分自身、やっつけて、どう考えても「どら息子」には負けてほしい、と思った。やりながら、本当に本当に、「どら息子」は始末した方が良くんじゃないかな、と思った。こいつを中途半端な形で生き残らせたりしたら「刑事 A」が吊し上げられるのは多分必至だから。でも、人質である「どら息子」を救うことができなかつたら刑事達は非常に非難されるのではないかと思つたら、始末できなかつた。多分、自分だけじゃなくてこの「ドラマ」を見ている人は皆、こいつ(「どら息子」)に負けてほしいと思うだろう。でも、負け惜しみだけど、この刑事は「別に免職になってもどうってことねえよ」と思っているんですよ(笑)。「不祥事」とか言われても、「俺は俺の正しいと思うことをやったんだ」と思ってるから。多分それをわかっている人もいると思う。そういう意味で「刑

事A」は好き。今回も、見られていてもそんなには気にならなかった。「反応は、あってもなくても良い」という感じでやっていたので。

### 3 終期（第8回～第10回）：否定的側面と肯定的側面の統合と、日常の枠や常識から自由になる体験を得た時期

#### 第8回：「小さな幸せ」の発見、衝動の発露

##### 「ドラマ」8 第8回

- {前略：「大学生 A」の下宿に「大学生 B」が何をするともなく訪れる。2人は、日常の他愛ない会話をしたりファミコンでサッカーの対戦ゲームをする。それに飽きた2人は、他の友人も呼び寄せ、麻雀を始める。しかし、自分の投げたパイをとられることが続いた「大学生 B」は次第に不機嫌になっていく。} -

大学生 A や、まあ、怒んなよ、もう！ こっちまで気分悪くなるやないか！

大学生 B 知るか！ お前！ 気分悪くしたくなかったら上がんなや！ 1発でさー！

大学生 A そんなん知るかって！ きたんだから！ いいやん!? たまには俺が勝ったってさあ。あんたいつつもさあ、あんたいつつも1位か2位で手堅いんだからさあ！

大学生 B ふざけんなって、お前。暇が続いて寂しさに紛れに遊びにきたらさあ、嫌なことばっかささせやがって……しやがってよう、本当！ もう絶交や、絶交!!

大学生 A そんなん言うなよ、もう。頭を冷やせ、頭を、頭を、頭を冷やせ。

- {後略：「大学生 B」はいったんは気を取り直すが負け続ける。そして逆上して麻雀台をひっくり返し、「さいなら！」と帰ってしまう。} -

#### 振り返り

自分が友達と遊ぶ時の雰囲気、かなり実話に近い感じでやった。実話だと、恥ずかしさもあるけど、これは見守り手に実話だと知らせないで見せたので、結構快感だった。やっていた感じしたのは「小さな幸せ」(笑)。こういう日常こそが楽しいんだ、みたいな。今回の「ドラマ」でやったようなことは普段は「ああ、

マンネリだな」と思うようなことだったけど、いざ実際にこういう形で劇にしたら何か「面白いなあ、こういう話をするの」と思う。何か、「日常生活の楽しさ」を感じた。実話を喋っていて、とりあえず「大学生 B」が自分みたいな感じ。麻雀で負けた時に「ちょっとやり過ぎかな」と思ったけど、「大学生 B」の怒りは多分自分のもの。「自分もこれくらいの状況に置かれたらこんなになるのかな？」と思って、あの場面は熱くなった。自分は普段怒る時、そんなに衝突するような「怒る」じゃなくて、ただ無言になる。ただ、自分もこれくらいひどく負けたら、「ひっくり返してやりたい！」という衝動に駆られたりすると思うし、ここでも本当にそう感じた。まあ、実際に友達とやってひっくり返しちゃったら、お互いに気まずくなって、もう勝負事はやめようということになるから、抑えるけど。

#### 第9回：日常の枠からの逸脱者を受け入れる人々とその後の「ヨントス」

##### 「ドラマ」9 第9回

- {前略：場末の酒場で「大学生」、「銀行員」、「客 A」が酒を飲みながらとりとめない話をしてる。暗い話ばかりする客に「マスター」が「もっと明るく行こう」と語りかける。客達は「マスター」に、伝説のラッパー「ヨントス」にそっくりだと言うが、「マスター」は否定する。} -

客 A おっ……そうか。うーん、どうも何かなあ……そうだな。まああの伝説のラッパーがこんな……うん、あの伝説のラッパーがなあ、こんな場末の酒場でねえ、こうパーティーなんかやってるわけないもんねえ。

大学生 しかしあの人最近テレビで見なくなったよなあ。ま、あれも見事な一発屋だったなあ。

- {中略：皆は明るい話題を探すが、不景気な話にしかならない。そこへ、「サンタクロース」が酒を飲みに来て、「誰もわしの存在なんか信じしてくれない。不景気なのでプレゼントを買うお金もない」と嘆く。次に「博士」が現れ、「また後輩に研究を盗まれた。やってられないよ」と愚痴を言う。皆が皆うまくいっていない現状に客達は「この店は負け組ばかり集っている。負け組オーラが充満している！」と感心する。そこへ「警

官」が登場する。「警官」は、のぞきをはたらいて免職になったことを告白する。}-

**銀行員** あなたそれでも警官ですか（笑）、ほんと。

**客A** しかし、あんた、しかし、何だ。俺達も上げえな、何か。そんなのぞき警官を、何か、あんまり違和感なく受け入れている俺らも何か、すごいな。

- {中略：皆、「警官」の話をはのぼのと聞き続ける。}-

**客B** 何かいいな。ちょっと、ちょっと何か、ハートウォーミングだぜ、今ちょっと。

- {後略：そこへ「金持ち」が登場する。皆の不景気な様子を見て、「これで美味しい物でも食べなさい」と皆にお金を渡す。皆は金持ちに感謝し、全員で街に繰り出す。}-

### 振り返り

何の盛り上がりもないダラダラした会話の連続という部分は前回の「ドラマ」と似ている。ただ、前回がほぼ実話ベースのものだったのに対して、今回は何もないところから即興で作っていった。ずっと気の抜けた感じというか、力が入っていない感じを楽しんでやっていた。珍しく、暖かいほのぼのとした感じの「ドラマ」になった。「サンタクロース」を出した辺りから特に。皆、本物の「サンタクロース」がきても、別にそれを不思議がることもなく驚きもせずに受け入れている。これがすごく面白いというか、ほのぼのとしていて、自分もこうありたいと思う。普通だったら浮くような人をサラリと受け入れたいなあ、と。ほのぼのとはまた全然違うけど、のぞきをした「警官」だってそう。ここではサラリと受け入れられている。普通は非難されたりするだろうけど、そういうの（非難）があったら面白くないと思った。「警官」の、わかっちゃいるけどやめられない、というのは好きだし、それで免職になったりバッシングを受けたりするにはすごく同情するものがある。だからなのか、皆に受け入れられる感じになっていった。

この人（「マスター」）は本当に「ヨントス」。「ヨントス」はもう音楽の世界から忘れられて、今回の「ド

ラマ」ではバーテンをやっている。そのことを、「見守り手が見ていたら多分わかるかな？ いや、もっと含みをもたせないとわかりにくいかな？」と思ったけど、「気づいてほしいけど、やっぱりあまりすぐにわかられるのは月並みな感じがして嫌だし」という気持ちがあった。「ヨントス」らしさを消し過ぎた気もするけど、「ヨントス」を前面に出すとまた「ヨントス」ばかりになってしまいそうだったので。前の「ドラマ」でメジャーデビューした後、「ヨントス」には色々あって、「あれから色々あったんだ」みたいな風にやった。「ドラマ」のなかにはそれは出ていないけど、自分のイメージのなかでそれがあればそれで良かった。

### 第10回：総集編－「ヨントス」を通した振り返り－

#### 「ドラマ」10 第10回

- {前略：これまでの9回の「ドラマ」に登場したキャラクターが続々とやってくる。実は、総集編ということでパーティをやるため「ヨントス」が呼び出したのである。「ヨントス」はそれぞれのキャラクターに関するエピソードを懐かしげに語り、1人1人を表彰していく。}-

**ヨントス** さ……じゃ、それじゃちょっと、MVPの発表です！ Yo！ うん！ MVPは……もちろん！ このヨントス・アルサンドロじゃ!!!!

**大学生** （呆れたように）……しらーっと……

**サンタクロース** さすがヨントスだ……この、この、場を盛り上げる能力は、神がかつてるとしか思えねえよ。

- {中略：皆のシラケをよそに悦に入った「ヨントス」は、「ここからは俺様のオンステージじゃ！」と張り切り、歌おうとする。その時、停電が起こる。}-

**ヨントス** （悔しそうに）ちっくしょう！ いいとこで！ もう……くそう！ 停電だ、もう！ せっかくこれから俺の舞台がはじまるとこやったのに！ 実はこれ、衛星生中継で、全国……全国っていうか、全世界195カ国に配信中やったのに！ クソー！ クソ！ クソ！ クソー!!

## 振り返り

今までとつながっていないような話で終わらせるというのも考えたけど、せっかくの10回目なので、今までとつながるようなものにしたかった。3ヵ月近く前からやっていたので、それはもう懐かしかった。こうやってやってみると、結構たくさんキャラクターを使ったなあと思う。一癖も二癖もあるのばかり選んだ気がする。もう、どのキャラクターも愛着があって好き。元々は表彰式じゃなくて「お疲れ様！」みたいな打ち上げをイメージしていた。でも、気がついたら「ヨントス」主催で表彰式にまで話が膨らんでいた(笑)。それと、「内輪」のはずが、「全世界」とかそういう話に伸びて(笑)。主催者がMVPというのも普通は変な話なんだけど、それも「ヨントス」の性格からするとむしろ自然かなと思う。

「ヨントス」はもちろん一番好きだった。彼は、見守り手の反応が多少なりともあったからここまでのキャラクターに成長していったのではないかなと思う。最初に好き勝手に「yo!」とかやっちゃったけど、それでも好評というか、嫌がられなかったので、「あ、やっちゃってもいいんだ」と思って、「じゃあ今回も使っちゃおうかな」と。あと、この成人誌を黙々と読んでいる「おじさん」もとても好きなキャラクター。人目を憚るような行為を普通の場所で黙々と、何があってもこの姿勢を貫いているというのが、ある意味硬派な感じで男らしい。

〈10回やってみてどうでしたか?〉全体を通して見ると、流れるにはすごく満足。話は毎回違ってはいても、作っているのは自分なんで、それが着実に積み重なっていった。キャラクターにしてもセリフにしても話の展開にしても、自分の好きなものが出た。だから自分に嘘をつけないというか、逆に何か照れくさくなるくらいだった。どこか自分のなかにあるものが出てきた感じがする。毎回、相手(見守り手)が予想しにくいもの、前回と違うものを作りたいと思っていた。他の人がやらないようなことをしたいと思っていた。普段もそういう、「他の人がやらないことを、という気持ちはあるけど、実際は、「人と同じにしておけば安心だ」みたいな感じになってほとんどできていない。あと、人の裏をかこうと思って却って浅はかに

なってしまう。だから、ここで「ドラマ」をやる時は、まず自分が満足しようという気持ちだった。自分は作文でも絵でも、何もないところから作るのはすごく苦手で、そういうのができることに憧れている。こうやって人形を使ってだと何とかやって、作品を作る人の気分を味わえた。それがすごく面白かった。

自分はゼミの発表でも人が言っている意見がわからなくて、「自分は頭が良くないんじゃないか」とずっと積った気持ちでいたけど、これをやっているのと、「俺だってものを作れるんだぜ!」と、気持ちが発散できた。

この調査をはじめ前の夏休み頃が一番しんどい時期だった。4年生だけ卒業は今年ではできそうになくて、「親に何て言おう?」とか、将来のことを考えて暗くなってたんですね。かといってやる気も出なくて。ザーっとアパートにいて、引き込みりと言っても良いような状態だった。将来のことを考えると行き詰まった気持ちになった。まあ、大学がはじまったのと調査があるので大学にくるようになったら、何となく気分が段々と戻ってきた。この調査の4回目辺りから今くらいに落ち着いたんで、ちょっとは社会復帰してきたかなと思う。

※別れ際に見守り手が「長い間ありがとうございました」と言うと、「こちらこそありがとうございました。頑張ってくださいね」とさわやかに応えてくれた。

## IV 考察

### 1 キャラクターを通しての体験

Bさんは10回の「ドラマ」のなかで、個々のキャラクターを通してどのような体験を得たのであろうか。

初期ではBさんは弱い「警官(第1回「街路場面」)」、逃げ腰の「スーパーマン(第1回「地下室場面」)」、悪徳な「サンタクロース(第3回)」など、キャラクターの弱さやずるさを前面に出していた。また、全裸の男女(第1回「地下室場面」)や成人誌を読みふける「おじさん(第1回地下室場面, 第2回)」など、性的な事柄も表現していた。このことから、Bさ

んは初期では、日常では出しがたい側面をキャラクターを通して表現していたと推測できる。「自分でも素直じゃないなと思った（第3回）」とBさんは語っているが、Bさんがある意味素直さを備えていたからこそ初期の段階で人間の業が表現されたのではないかと考えられる。

中期ではまた異なる側面をもつキャラクターが登場した。Bさんは第4回で当初の目的として、自分の嫌いな人達を風刺する意図でヒップホップのDJ「ヨントス」が登場させた。しかし、「ヨントス」のセリフを発するうちに思いがけず「ヨントス」に親しみを持ち、その後も第5回、第9回、第10回で彼を登場させた。第4回、第5回とも「ヨントス」のエネルギッシュで我が道を行く様子が表現されるが、その後、第9回ではそれまでと異なった趣で登場する。この回での「ヨントス」は物静かに客の話に聞き入り過去を伏せている場末の酒場の「マスター」として登場している。そして「ヨントス」は、第10回の総集編としての「ドラマ」で、パーティの仕掛け人、授賞式の主催者としての役割を務めるが、総集編を「ヨントス」に仕切らせたことから、「ヨントス」はBさんにとって鍵となるキャラクターであったと考えられる。

では、当初は「嫌な奴」にとどまるはずだった「ヨントス」がなぜBさんの心をこれほどまでに惹きつけるキャラクターになったのであろうか。そもそもBさんが当初「ヨントス」すなわちヒップホップの人達に対して抱いていた「非凡さを狙う凡人」のイメージは、「目立ちたい」、「非凡でありたい」という志向をもちながらも日常生活においては「皆と同じにしておけば大丈夫」という思いから安全な方向を選んでしまう（第10回）Bさんにとっての、活かされていない側面ではないかと考えられる。その活かされていない側面を「ヨントス」という役割を通して表現することによって、Bさんは「目立つにしても格好悪い目立ち方をしてはならない。単なる目立ちたがり屋の凡人になってはいけない」という、目立つことに対する窮屈な構えを緩め、「味のある目立ちたがり屋がいたって良いではないか」という気持ちに変えて、「ヨントス」というキャラクター、ひいては「ヨントス」のように目立つことを、受容していくことができたのではなかろうか。

Bさんは目立つことを心のどこかで望む一方、冷静さや落ち着きといった側面もほしいと願っている。それは強盗に乱入されても冷静に場を締めている「ポール」（第5回）、変身装置で姿を変えられてもさほど動揺せずに落ち着いている「幼児（助手）」（第6回）を通して表現されている。その他にBさんにとって印象に残るキャラクターとして、第1回、第2回、第10回に出てきた「おじさん」がいた。Bさんは、しゃがんで雑誌のようなものを眺めている中年男性の後ろ姿の人形に対して、「成人誌を読んでいるように見えて仕方がない」とし、「この、人目を憚る行為をいつでもどこでも黙々と続ける姿勢に硬派な男らしさを感じる」とコメントしている。先にも述べたように、Bさんは日常生活においては「皆と同じに」という安全な道を選んでおり、それに対してジレンマを抱いていた。そんなBさんにとって「おじさん」は、周りがどう思おうと意に介さず我が道を行く憧れなのではなかろうか。一方、第7回では、一言もセリフを発することなくただの人質で終始するはずだったキャラクター（「どら息子」）が父親の権力を振りかざすセリフを発した。その瞬間からBさんはこのキャラクターに「嫌な奴」のイメージを総動員して投影し、「刑事A」によって制裁を加えさせている。同じ「嫌な奴」であっても「ヨントス」とは逆に、Bさんはこの「どら息子」に対しては、セリフを発すれば発するほどに嫌悪感が増していったようである。「自分がなかに入って『この野郎！』と言って殴っている感じだった」、「ちょっと楽しかった」などの語りからも、Bさんが嫌悪する人物のイメージを「どら息子」に投影し、「刑事A」を通してやっつけ、一種のカタルシス体験を得ていたことが考えられる。その一方で、このように「どら息子」に制裁を加えて免職になった「刑事A」については、「事情を知らない人からは色々非難されるけれども、彼は自分がしたことは間違っていないと思っているし、わかっている人はわかっている」と述べ、そのような「刑事A」を好きだと語っている。

そして終期では、それまで目立ちたがり屋だった「ヨントス」を、自分の内に過去を秘め物静かに客の話に聞き入る「マスター」として登場させることで（第9回）、「非凡さを狙う没個性の目立ちたがり屋」というBさんにとっての否定的な側面と、「冷静さ」

という肯定的な側面とが「ヨントス」というキャラクターを通して統合されていったことがうかがえる。「サンタクロース」やのぞきをして免職になってしまった「警官」などの、周りから存在を驚かれたり行為を非難されたりしても然りのキャラクターをサラリと受け入れる酒場の客達について、「自分もこうありたい」とBさんが語っていること(第9回)からも、このことは言えよう。

このようにキャラクターに着目してみると、Bさんは初期では日常では表現が憚られる側面を表現している。そして中期では、これまで否定的にとらえていた側面を表現することでその側面への歩み寄りを果たし、「こうなりたい」という肯定的側面を表現している。また終期では否定的側面と肯定的側面との統合や、日常の通念からはみ出しがちな側面をも受け入れるといったプロセスを歩んでいる。そしてこのプロセスには、Bさんの望むあり方、「常識や世間体や権力などにとられず、我が道を行きたい。そしてそのような生き方をしている人達を受け入れたい」という思いが脈々と流れていたことが感じられる。Bさんはこの10回の「ドラマ」のなかで確かにそのような生き方を体験していたのではないかと推察される。

## 2 キャラクターという仮面、「ドラマ」の架空性とそれによる気づき

では、なぜBさんは日常の枠にとられずに「ドラマ」を表現できたのであろうか。第2回でBさんは、離婚を迫られた「おじさん」の往生際の悪さを表現しながら「我がことを見ているかのような気がした」が、『これが自分で』とか言わないと、それが自分の素(す)とはわからないかなと思ってやった」と語っている。また、10回の「ドラマ」を振り返って、「人形を使ってやるのは『喋っているのは俺だけど、俺はこいつ(キャラクター)のセリフを言っているんだから俺じゃない』というものがある。だから『何を言ってもいいや』みたいに思える」と語っている。これらのことから、Bさんが日常の対人関係においては表しがたい側面を、キャラクターという仮面を身につけることで表現し、その仮面を外すか否か(後で「これは自分だ」と明かすかどうか)を見守り手の反

応によって判断していたと考えられる。また、普段Bさんは、腹を立てても相手とのその後の関係を考慮し、衝突が生じるような反応を避けると語っているが、第8回ではBさん自身として動かしていた「大学生B」が麻雀で惨敗して立腹し、麻雀台をひっくり返した。そして、「ひっくり返してやりたい衝動に駆られた。でも実際に友達とやっていてひっくり返したら後がなくなるので、実際にはひっくり返さない」と語っている。このことから、Bさんが自身の友人との交流を再現しながらも、「ドラマ」の架空性に安心感を抱き、その安心感に支えられて、日常においては抑えている衝動を表現できたと考えられる。

しかし、Bさんはキャラクターという仮面、「ドラマ」という架空性のもとでただ奔放に表現していたわけではない。「ヨントス」を登場させようと思った時に、『ヨントス』を出したが最後、彼の独壇場になりそう」と思い、登場させずに「ドラマ」を表現している(第6回)。そして第7回では、「嫌な奴」のイメージを投影した「どら息子」を完全に負けさせたいという衝動に駆られつつも、「刑事が『どら息子』を殺してしまうまでやるのはさすがにまずい」思い、「刑事A」の暴行をある程度の段階で止めている。このようなことから、Bさんが「ドラマ」のなかで日常の枠組みや常識から離れて自由に表現を行う一方で、ある程度の抑制を働かせて衝動の暴走を防いでいたと考えられよう。

さて、調査に参加する前、大学4年生のBさんは卒業や将来について見通しが立たず、鬱々とした気持ちで周囲との接触を避けていたという(第10回)。また、同級生と自己を引き比べ、自分には創造性や理解力が乏しいと感じ、劣等感を抱いていたとのことである。しかし、「ドラマ」を表現するにしたがい、「自分だっものが作れるんだ!」と感じた(第10回)。恐らく、Bさんは本来、創造性、理解力共に優れた青年であるが、将来に対する重圧や、日常の煩い事などによってそれら可能性が埋没していた、その可能性が「ドラマ」を表現することによって見えてきたと考えられよう。またBさんは、自分自身と友人達を登場させ、実話に近い「ドラマ」を表現した時(第8回)、普段はマンネリに思っていた友人との会話に日常生活の小さな幸せを感じたという。「照れくさくなるくら

いに自分のなかにあるものが『ドラマ』に出るので、自分に嘘をつけない（第10回）」と語っている通り、「ドラマ」のなかでBさんは、実話であれフィクションであれ、自己の価値観、主義、好き嫌いなどを時には意識的に、時には無意識的に表現している。それはBさんにしか表現できない、世界で唯一の「ドラマ」である。「心のもやもやしたものが言葉になって出て、そうやって言葉に出すことで確認できる（第10回）」という言葉からも、BさんがBさん自身の「ドラマ」を通して、自己の意外な側面との出会いや、自己の既知の側面の見つめ直し、そして普段は見過ぎていた日常事象のとらえ直しを体験していったと考えられる。

### 3 見守り手との関係性

Bさんと見守り手との関係性は10回の調査のなかで変化していった。

まず、Bさんが見守り手の存在をどのように感じていたかに着目すると、初期は、第1回（地下室場面）では、芸能界の話題と関連したセリフを発する際に見守り手がその話を知らなかったらどうしようかと躊躇していた。その後も、「1人で（「ドラマ」を）作ると自己満足になりそう。自分では面白いと思っていても他の人が見てどうなのかかわからないと、気持ち悪くなる（第2回）」、「面白いことを言ったら、ちゃんと笑ってくれるだろうか」と、見守り手を意識してキャラクターのセリフを言っている部分がある（第3回）などの思いが見受けられた。そのように見守り手を意識することに不自由さを感じていたBさんであるが、中期以降は笑わせようという気負いがなくなり、見守り手の反応もさほど気にならない、反応があってもなくても構わない、と思うようになっていった。しかし一貫して、次にどのような「ドラマ」を表現するかが見守り手に予想できないものにしたい、という気持ちが存在していたようである。この、予想外のものを志向する傾向には、既に何度も記した「非凡でありたい」というBさんの思いが関係していると考えられる。そして、見守り手を意識した、「笑わせよう」という気負いのもとに表現される「ドラマ」、すなわち「見せるための『ドラマ』」から、予想外のものを目

指すという、Bさんの欲求を満たす「ドラマ」、すなわち「自分（Bさん）が満足するための『ドラマ』（第10回）」へと変化していったと考えられる。第8回、第9回でBさんの出身地の言葉が所々見受けられたが、このことから、Bさんがリラックスして自分のペースで「ドラマ」を表現していたことがうかがえる。また、回を追うごとに「ドラマ」が自分のものとしてBさんのなかに定位されていき、「ドラマ」やそこに登場するキャラクターに対して愛着が湧いていったとも考えられる。そして「ドラマ」の見守り手に「見せる」ための気遣いをしなくなり、反応や存在が気にならなくなっていったと思われる。この、気にならなくなったということは、見守り手が存在しても存在していなくても同じという意味ではなかろう。気にならないという気持ちは、「この人は私の表現全てを否定せず受け止めてくれる」、という信頼感が根底にあってはじめて生じたのではないか。このことは、Bさんが第4回で「ヨントス」をはじめて登場させた際に好意的な反応を見守り手から感じたことで、「あ、やってもいいんだ」と思い、次の回でも「ヨントス」を登場させ、第10回では『ヨントス』は見ている人（見守り手）の反応もあってここまでのキャラクターに成長したのだろう」としみじみと語ったことから納得できよう。「表現者」であるBさんと見守り手とともにあることで「ヨントス」が育っていったと推察される。

このように「ドラマ」では自由に表現し、その後の面接でも自然な様子で生き生きと内省を語ってくれたBさんであるが、「ドラマ」から離れた状況、すなわち、来室時や退室時に関しては、第7回までは物静かな堅い様子が見受けられ、見守り手も堅苦しさや距離を感じずにはいられなかった。Bさんが第5回で約束の時間より5分ほど前に調査室の近くまで来て踵を返し、約束の時間ぴったりに再び現れたというエピソードも、時間を厳守するBさんの几帳面な側面を表していると同時に、「ドラマ」や「ドラマ」の振り返り以外の状況、すなわち「ドラマ」を介さない状況においてBさんが居心地悪く感じていたことや、Bさんと見守り手との間に隔たりが存在していたことを物語っていよう。そのようなBさんであるが、第8回以降は表情も態度も声の調子もリラックスしたものになっ

ていった。そして第10回では、これまでの調査の期間の振り返りと重ね合わせて、自己が直面している課題について語ってくれた。恐らく第7回までは、「ドラマ」を介した状況での見守り手と「ドラマ」を介さない状況でのそれはBさんにとって分離した存在であったのではないか。すなわち、見守り手は「ドラマ」を介した状況では「ドラマ」、そして「ドラマ」の振り返りを見守ってくれる相手として存在し、Bさんは自由に表現できた。しかし、「ドラマ」を介さない状況における見守り手はもはや見守る存在ではなく、Bさんにとっての「日常の対人スタイルを働かせるべき相手」、「年上の人には礼儀正しく」、「女性には馴れ馴れしく話さない」などの対応をとるべき相手であったと考えられる。すなわち、「ドラマ」を介した状況ではBさんは日常の殻がとり払われ、見守り手と関わり、「ドラマ」という共有物をもっていたが、「ドラマ」を介さない状況はBさんにとって緊張するものであり、見守り手は気遣いや遠慮が働く存在、隔たりのようなものを感じさせる相手として位置づけられていたと推測できる。それが「ドラマ」をともに味わい、見守り手とBさんとの関係性が構築されていくにしたがい、これまで「ドラマ」を介さない状況ではBさんにとって隔たりが感じられていた見守り手の存在が、Bさんのなかで「ドラマ」を介すか否かに関わりなく、1人の「日常の対人スタイルから離れた接し方をして大丈夫な存在」すなわち真の見守り手として統合されていったと考えられる。例えば、第8回で自分と自分の友人とのやりとりを「ドラマ」で表現したことは、Bさんが見守り手を仲間として位置づけ、自分の日常や自分の友人達を見守り手に紹介してくれたとも受け取れるのではなからうか。

#### 4 総集編的な「ドラマ」の意味

Bさんは最終回の10回目の「ドラマ」で、これまでに登場した主要キャラクターを登場させ、パーティを繰り広げた。パーティの主催者は「ヨントス」であり、「ヨントス」を通してキャラクターの1人1人を表彰し、エピソードを語った。「ヨントス」からは「懐かしいなあ」というセリフが幾度も発せられた。「ヨントス」が「あなた、こうだったよね」と1人1

人のキャラクターに語りかけるところは、Bさんが「ヨントス」を通じてキャラクターに語りかけると同時に、見守り手にも語りかけている感じがし、見守り手も感慨深さを覚えた。心理臨床の場において、プレイセラピーでクライアントがこれまでやってきた遊びを一通りやってみせたり、面接でこれまでの経緯をクライアントが語り直したりすることが最終回のセッションで見られることが少なくない。山口(2001)は、心理臨床の場で見出された物語にクライアントが魅了され、治療が終結した後も彼/彼女がその物語の一点にとどまり続けることの危険性を指摘し、その物語が未来へと開かれ続けることが大切であると記している。心理臨床の場で見出したものがクライアントにとってその後の人生を歩んでいく糧となるには、これまで歩んできた過程をクライアントとセラピストがともに振り返り、日常生活に立ち戻っていくための作業を行うことが必要なのであろう。Bさんの場合も、これまでの意味の確認をキャラクター達との間で、そして見守り手との間で行い、そうすることによって、それぞれのキャラクターを通して体験した振る舞いや感情を、確かに自分が感じたものとして自己のなかにとり入れていったと考えられる。

日常生活では活かせていない自己の他の側面をキャラクターを通して活かした体験が、人生の課題に直面し、鬱積した気持ちを抱えていたBさんの今後の人生に少しでも役に立つことを願ってやまない。

#### 今後の展望

本研究では、継時的調査による事例的研究という、心理臨床面接の枠組みに近い形で調査研究を行った。その結果、「表現者」が「ドラマ」のプロセスを重ねることによって得る体験や、見守り手との関係性の変遷など、1回の調査研究では得がたい知見が得られた。調査でありながらもこのように心理臨床面接で見受けられるような現象が生じた本研究の調査方法は、心理臨床の場で生じた現象をクライアントとセラピストとの関係性に基づいて考えていく研究として有効なものになり得ると考えられよう。しかし、同時に、調査は

あくまでも調査であり、心理臨床面接と全く同じではないことも認識しておくことが必須である。本研究で用いた調査方法においては、10回という限られた調査回数のなかでは、その枠組みに収まりきる範囲内では「表現者」のテーマは扱うべきではなく、これが本研究で用いた調査方法の限界とも言える。今後はこの点を十分に認識し、この調査方法による研究をさらに積み重ねていきたい。

また、本研究では MAPS 人格投影法検査用具のミニチュアの舞台と人形を用いた即興劇を「ドラマ」探求の手がかりとして採用したが、研究を行うなかで、このようなミニチュアの舞台と人形を用いた表現は単に研究の知見を提供するにとどまらず、治療の可能性を有することがうかがわれた。今後はその可能性と限界を明確化し、心理臨床場面での活用を目指したい。

#### 引用文献

- 藤原勝紀. (2001). 三角形イメージ体験法——イメージを大切に心理臨床. 東京：誠信書房.
- 福武総一郎ほか (編). (1984). 英和大辞典カラー・オックスフォード. 東京：福武書店.
- 河合隼雄. (1970). カウンセリングの実際問題. 東京：誠信書房.
- 河竹登志夫. (1978). 演劇概論. 東京：東京大学出版会.
- 岡本直子. (2001). 心因性発熱・自律神経失調を伴う不登校小 5 女児とのプレイセラピー. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究, 26, 290-295.
- Shneidman, E. (1947). The Make-A-Picture-Story (MAPS) projective personality test: A preliminary report, *Journal of Consulting Psychology*, 11, 315-325.
- 山口素子. (2001). 心理療法における自分の物語の発見について. 河合隼雄 (総編集), 講座心理療法第 2 巻 心理療法と物語 (pp.113-151). 東京：岩波書店.

#### 付記

本論文は、京都大学大学院教育学研究科に提出した博士論文の一部に加筆修正を行ったものである。加筆修正は文部科学省科学研究費補助金 若手研究 B 『『間接的ドラマ法』の心理臨床場面適用に関する研究』(研究代表者：岡本直子 沖縄国際大学) により行った。論文をまとめるにあたりご指導くださった藤原勝紀先生 (京都大

学), 皆藤章先生 (京都大学), 貴重なご助言をくださった奥久田巖先生 (琉球大学) に心よりお礼申し上げます。また, 調査に協力頂きました B さんに深く感謝いたします。

(2005.4.23 受稿, 2006.5.3 受理)